

グアテマラ、サンタ・カタリナ・パロポのウィピルについての一考察 —— 赤から青への変化を追って ——

湯川 瑠以子

A Study on the Huipil of Santa Catarina Palopó, Guatemala

Ruiko YUKAWA

1. はじめに

中米グアテマラの高地にはマヤ系先住民族の村が点在している。¹⁾ 彼らは村ごとに色や文様の異なる民族衣装を受け継いでおり、固有の衣装を持つ村の数はおよそ80ともいわれている。²⁾ そのうちのひとつ、サンタ・カタリナ・パロポは、近年村の特徴が最も現れるウィピル (Huipil・上衣) の色が、赤から青へと急激に変化したことで注目されている。

色の変化の要因は外部からの影響であると指摘されている。これについて星野利枝氏が「染織の100年をたどる－サンタ・カタリナ・パロポ村から－」に詳しく報告しているので引用する。

「自分好みの色調のウィピルがほしいと思ったアメリカ人が、青系色の糸を買い揃え、村の女性にウィピルのオーダーメイドをした。それがきっかけで村に青色のウィピルが広まったと聞いて、思わず手を打った。流行の仕掛け人は、何も村の人間とは限らないと。」³⁾

筆者は2011年7月に現地を訪れ村の中心地を歩いたが、教会で見かけた老婦人や、道端で染織品を売る女性、小学校の生徒まで、皆一様に青系色のウィピルをまとっていた。もっとも近代化の波を受けて、手織りのウィピルではなく既製のブラウスを着ている若者も見られたが、未だ「青い民族衣装の村」は健在であった。

東京家政大学博物館（以下、当館）では、この村の赤を基調としたウィピル（以下、資料 [1]）と、青を基調としたウィピル（同、資料 [2]）を共に所蔵している（写真1、2）。この2点はウィピルの色が変わったことを具体的に示す一例として貴重な資料であると思われる。そこで本稿では2点の概要をまとめ、両者を比較しながら、赤から青への変化という現象について考察し、今後の研究のための資料としたい。



写真1 資料 [1]-a



写真2 資料 [2]-a



写真3 資料 [1]-b



写真4 資料 [2]-b



写真5 赤いウィピル
2011年撮影



写真6 最近流行のウィピル
2011年撮影



写真7 染織店で保存していた「古い」ウィピル
2011年撮影

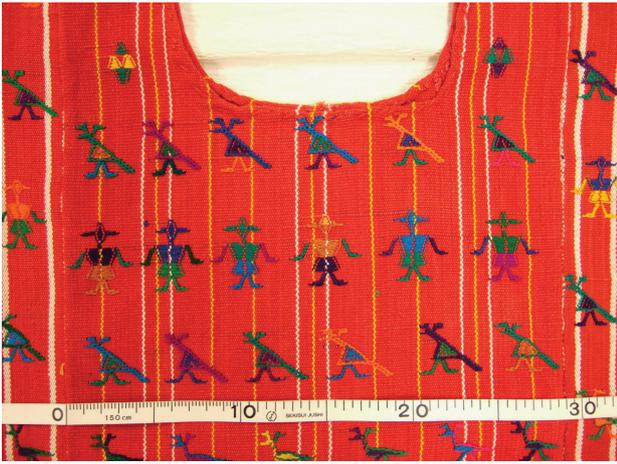


写真8 資料 [1]-c



写真9 資料 [2]-c



写真10 資料 [3]-a



写真11 資料 [3]-c



写真12 資料 [3]-b



写真13 資料 [3]-d

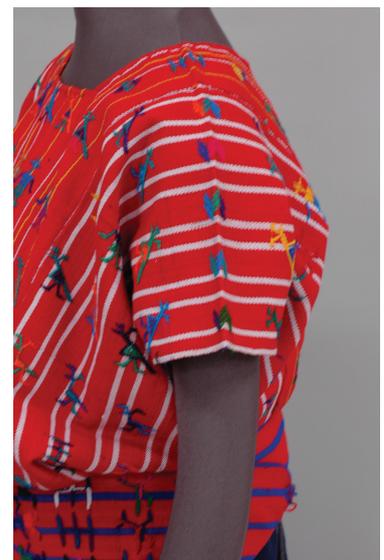


写真14 資料 [1]-d

2. 調査結果

(1) 資料 [1]

地組織は平織で、経糸は赤、白、黄の3色を使用している。このうち赤い糸は調査の結果、綿と判断された。⁴⁾ 緯糸は経糸と同一と思われる赤い糸を使用。織り密度は経17本/cm、緯7本/cmと経糸の密度が高い。多色の糸を用い、片面縫取織の技法で人や動物などの文様を織り出している。構成は、着丈の倍の長さに織られた長方形の布を3枚継ぎ、中央に首を通す穴を開けて肩山から着丈に折り、脇を縫い合わせた貫頭衣型。縫製は手縫い。衣服重量は300g。着装時の前後の向きは、文様や衿ぐりの形状に大差がないため明らかではない。今回は布の織り始めのある方を前とした。

(2) 資料 [2]

地組織は平織で、経糸は資料 [1] と同じく赤、白、黄の3色を使用。緯糸も赤の経糸と同一と思われる。織り密度は場所によってばらつきがあるが、平均して経23本/cm、緯7本/cm。経糸の密度がさらに高くなっている。片面縫取織で幾何学文様が隙間なく織り込まれている。衣服重量は550gと資料 [1] に比べてかなり重く、その要因として織り密度が高いこと、織り文様が密であることが考えられる。構成は資料 [1] と同じく3枚継ぎの貫頭衣型。縫製は手縫い。胸部の位置にあたる継ぎ目には、左右の布の縁に11cmほど縁かがりが施されている。現状ではつき合わせにして縫い継がれているが、もとはこの部分の継ぎを縫い残し、授乳のためのスリットを開けていたと考えられる。⁵⁾ この予測が適当ならば、本資料は10代後半～30代後半くらいの女性用と推察される。

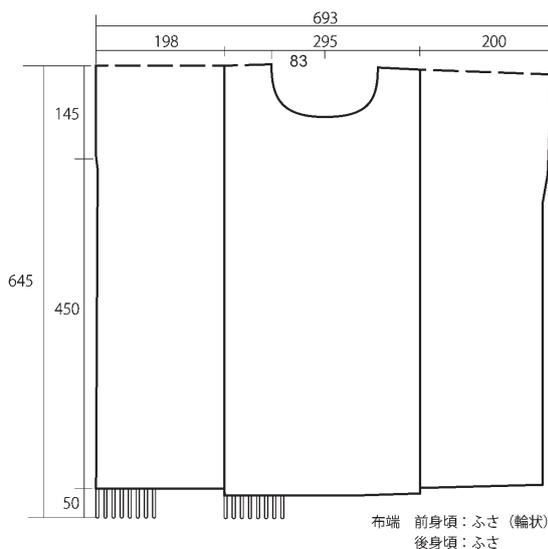


図1 資料 [1]

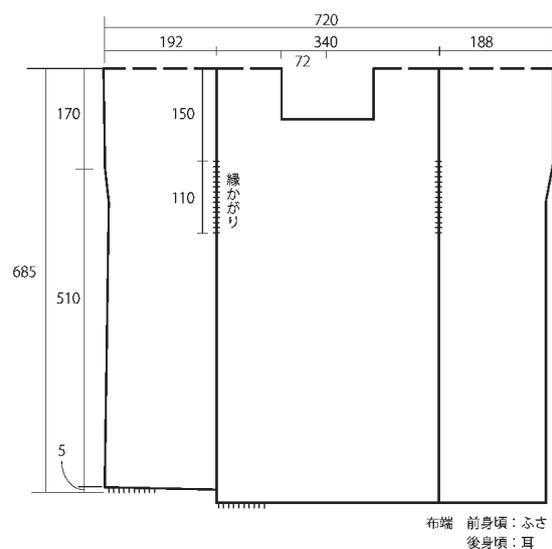


図2 資料 [2]

(3) 資料 [1] [2] の着装状態の撮影

実際に着用した際の印象について検証するため、資料 [1] [2] をマネキンに着装し写真撮影を行った。資料 [2] は、コルテ（下衣）、ファハ（帯）とともに衣装一式として収蔵されており、着装にはこれらを使用した。資料 [1] については、適当なコルテとファハを所蔵していないため、コルテは資料 [2] と同じものを、ファハは子ども用の赤い色調の物を使用した。⁶⁾

撮影された写真3、4を見ると、同じ資料を広げた状態の写真1、2と比べて、赤、青の対比がより鮮明になっている。この調査により、資料 [1] [2] は着装時において、それぞれの色調が最も際立つということがわかった。

3. 2点の比較と考察

(1) 年代と位置付け

今回調査した資料2点は東京家政大学博物館編『五色の燦き－グアテマラ・マヤ民族衣装』に掲載されている。その解説には「以前は赤系が基調色であったが、最近では青系に代わっている」⁷⁾とあり、「古い色のウィピル」として資料 [1] が紹介されている。資料 [1] [2] はともにグアテマラの首都に所在するイシチェル民族衣装博物館⁸⁾を通じて1991年に購入されたものであり、製作年は購入年とほぼ同時期である。ウィピルの色調が赤から青へと変化した時期について、星野氏は1970年代後半としており、資料 [1] [2] はどちらもその後に製作されたものということになるが、資料 [1] を「古い色のウィピル」と位置付けることは可能なのであろうか。

豊富な天然染料に恵まれたグアテマラでは、かつては衣装の織り糸を染めるために様々な種類の天然染料を使用していたが、合成染料が輸入されるようになって以降その使用は激減した。今日見られる極彩色の衣装は「グアテマラ・レインボー」などと称されるが、その色彩は基本的に合成染料によるものである。⁹⁾ 星野氏によると、サンタ・カタリナ・パロポにおいても1900年代製のウィピルの一部に合成染料で染めた糸の使用が認められ、1930年代頃にはより鮮やかな赤い糸を使用して、白地に赤の格子や経縞を表わすようになったという。また「1950年代以降になると、白地の部分が減少し、イロ・アレマン¹⁰⁾ が地糸として大きな面積を占めるようになる。また湖の動植物が文様化されて多色で織り込まれる。」そして「これが崩れるのが1970年代後半である。」¹¹⁾と述べ、これを境に青いウィピルへと変化していくとしている。

これを裏付けるように、イシチェル民族衣装博物館所蔵の1960年代製のウィピルは鮮やかな赤地が目立ち、多彩な色糸で全面に細かい文様が織り込まれている。¹²⁾ 『THREADS of IDENTITY』にも1960年代製のウィピルが掲載されているが、こちらも同様の特徴が見受けられる。¹³⁾ また、1971年にCarmen L. Petersenが描いたこの村の女性は、赤地に青や緑、黄色の細かい文様の入ったウィピルを着ており、当時の衣装の実態を確認することができる。¹⁴⁾

当館所蔵の資料 [1] の特徴を概観すると、鮮明な赤の地糸が大きな面積を占め、人や動物と見られる文様が多色の色糸で織り込まれている。したがって、資料 [1] の製作年代は1991年と新しいが、使用されている糸の色や文様の特徴から、1960年代～70年代後半までのスタイルというこ

とができる。

実際、色の変化が起こったとされる1970年代後半以降に赤いウィピルが完全に姿を消したわけではない。『NHK世界手芸紀行③』には1990年頃のサンタ・カタリナ・パロポの写真が掲載されているが、そこに写るインディヘナの女性が着用しているウィピルは赤を基調としたものと、全体的に青く見えるものが混在している。¹⁵⁾ さらに2011年に筆者が現地を訪れた際、幸運にも上述の書籍に登場する女性を訪ねる機会を得たのだが、彼女は当時と同じく赤を基調としたウィピルを着用し、それと同じ色調、同じ文様の布を織っていた(写真5)。また、別の染織店で民族衣装を着た姉妹に出会ったが、姉は最近の流行と思われる、臙脂の地に青や緑の色糸で文様を織り込んだウィピルを着用していたのに対し(写真6)、妹が着ていたものは古いスタイルの特徴を持った赤いウィピルであった。筆者が博物館で働いていることを知った店の主人が「古いものだ」と言って家で保管していたウィピルを見せてくれたが、それは鮮やかな赤い地に青系統の色糸を用いて動植物が織り込まれたものであり、当館所蔵の資料[1]と近いスタイルであった(写真7)。赤いウィピルは現在も織られ、着用されていると同時に、現地でもすでに「古く」なっているのである。

これらのことから、資料[1]を「赤いウィピル／古いスタイルのウィピル」、資料[2]を「青いウィピル／新しいスタイルのウィピル」と位置付けて両者の相違点についての考察を進めていく。

(2) 使用されている糸の色

先に引用したように、ウィピルの色の変化はアメリカ人が「青系色の糸を買い揃え」てウィピルのオーダーメイドをしたことがきっかけであったという。そこでまずは資料[1][2]について、使用されている糸の色に注目する。

1) 地経糸・地緯糸

赤いウィピルの「赤い」という印象は、地糸の色によって作り出されている。資料[1]は織り密度が経17×緯7(本/cm)と経糸の密度が高く、緯糸は経糸に隠れて見ることがない。そのためここでは経糸の色が重要となる。ウィピルを構成する3枚の布のうち最も赤い中央の布は、赤・白・黄の3色の経糸でストライプがあらわされている。大部分が赤の経糸で占められている中に、それぞれ経糸2本で構成される白・黄のストライプが計15本配されている。両サイドの布に見られる白いストライプは経糸6本で構成され、より太く、はっきりとした経縞になっている。

一方青いウィピル、資料[2]に目を向けると、全体の半分以上に青系色の幾何学文様が織り込まれているため、そこでは地糸の色を見ることができない。しかし文様の無い部分には、鮮やかな赤い地糸を見ることができる。この部分は、着装時にはコルテ(Corte・下衣)が上から重なるため、実質的に目立つことはないが、資料[1]と配色が非常によく似ており注目に値する。中央の布は資料[1]と同じく経糸2本で構成される白・黄のストライプが計18本見られる。白、黄の並びこそ異なるものの、その様相はかなり似通っている。さらに両サイドの布に見られる白のストライプ

イプは6本の経糸で構成されていて、これも資料 [1] と同じである。織り密度は経23×緯7（本/cm）と経糸の密度が高くなり、緯糸は経糸に隠れてよりいっそう見え難くなった。

地経糸・地緯糸について比較した結果、2点の資料はどちらも経糸の赤を基調としており、さらに白や黄の経糸によってあらわされるストライプも極めて近いことがわかった。地経糸・地緯糸に大きな違いが見られないため、赤・青の違いを生むのは文様をあらわす絵緯糸の色の違いであると予測される。この点について次の項で考察する。

2) 文様を表す絵緯糸

刺繍のようにも見える文様は、伝統的な後帯機によって布を織り進める過程で、前述の地組織を構成する経糸・緯糸とはまったく別に、必要な長さだけ任意に加えられる糸である。

ここでは、資料 [1] [2] に使用されている絵緯糸の色を目視によって調べた。調査の対象とした範囲は、ウィピルを構成する3枚の布のうち、着装時に最も目立つ中央の布の前面、すなわち前身頃である。調査の結果、資料 [1] は全16色の色系がそれぞれ複数回使用され、合計98箇所（箇所）に織り込まれていることがわかった。使用されている色系を色系系統に大別すると、使用箇所が多い順に〈緑〉32箇所、〈紫〉25箇所、〈青〉24箇所、〈橙〉6箇所、〈茶〉6箇所、〈黄〉3箇所、〈ピンク〉2箇所であった。一方資料 [2] は全20色の色系が合計187箇所（箇所）に織り込まれている。色系系統別に見ると、〈青〉77箇所、〈緑〉75箇所、〈紫〉24箇所、〈茶〉5箇所、〈ピンク〉5箇所、〈赤〉1箇所である。

資料 [2] は [1] に比べ使用される色系の色数、使用箇所が増え、特に青系と緑系の色系の使用が増えている。逆に黄・橙の使用は減っている。この調査から、青系や緑系の色系の使用箇所が増えたことが、青いウィピルへの変化の一因となっていることがわかった。

(3) 文様の変化

2点の資料に使用されている糸の色について比較した結果、地経糸・地緯糸の色において大きな差が見られなかった一方、絵緯糸の色に違いが見られた。資料 [2] は絵緯糸に青・緑系の糸が使用される箇所が増え、青いウィピルを生み出す一因となっていることが明らかになった。しかし同時に資料 [1] にも青系の絵緯糸が多用されていることがわかり、絵緯糸はウィピルの色を左右する決定的な要因とはなり得ないのではないか、という疑問が生じた。では赤いウィピルと青いウィピルの違いを決定づけるものは何だろうか。それを探るために、2点において大きく異なる文様の形状とその文様が配置される密度に注目した。

1) 文様の形状

『五色の燦き－グアテマラ・マヤ民族衣装』において、「赤系のウィピルには神話に出てくるエレメントが織り込まれ、青系は主に幾何学文様である」¹⁶⁾ とあるように、両者の文様は驚くほど異なっている。資料 [1] に織り出された文様は、人、動物など、具体的なものであるのに対し、資

料 [2] はジグザグ、斜めに連なる菱形など、幾何学文様が隙間なく織り込まれている（写真8、9）。

2) 文様の密度

資料 [1] は、着装時に最も目立つ胸部周辺に、帽子を被った男性と見られる文様が横一列に並んで織り込まれている（写真8）。その大きさは平均してタテ40mm、ヨコ40mmで、隣り合う文様との間隔は2～15mmである。男性文様の上下には動物文様が織り出されていて、男性文様の列との間隔はおよそ25mmである。一方資料 [2] には連続したジグザグ、菱形などの幾何学文様が布幅いっぱい帯状に織り込まれている（写真9）。幾何学文様の帯と帯の間には、やや細い25～30mm程度の×文様や菱形文様の帯が織り込まれ、文様と文様の切り替えの役割を果たしている。この切り替えの細い帯にあるわずかな隙間から、地糸の赤い色がのぞき見える。

資料 [1] のように文様が小さく、隣り合う文様との間隔が広ければ、地組織の色が表に現れウイプル全体の色の印象を左右する。たとえ絵緯糸に青や緑系の糸を多用していたとしても、地糸に赤い糸を使用していれば全体として見たウイプルの色の印象は「赤」となる。では、その文様のサイズを大きくし、間隔を詰めたらどうか。資料 [2] のように、青い糸系であらわされた文様の下に赤い地糸が隠され、全体として青いウイプルという印象を生むのではないだろうか。この仮説を示す例として、当館所蔵の子ども用のウイプル（以下、資料 [3]）を見てみたい。（写真10）。

赤い地に、トウモロコシの木や鳥、機織りの用具など具体的な文様を表わしていることなどから、古いスタイルのウイプルと位置付けることができる。資料の寸法は資料 [1] [2] と比べてかなり小さいが、文様のサイズはタテ35～40mm、ヨコ40～50mm前後で、密に織り込まれている（写真11）。隣り合う文様同士はすでに境界を接しており、これ以上間隔を詰めることは難しいと思われる。ここまで密に文様を織り込んでいても、着装状態の写真を見ると、文様の隙間からのぞく地糸の赤がウイプル全体の色を決めていると判断される（写真12）。したがって、動植物文様を織り込む場合、たとえ青系の糸を多用し、大きな文様を密に織り込んだとしても、青いウイプルが生まれるとは考えにくいという結論にたどりついた。

しかし、資料 [3] にはもう一つ別の点で注目すべきことがある。それは肩の部分に織り込まれた文様である。資料 [3] はウイプル全体が動植物文様で埋め尽くされているように見えるが、肩の部分にジグザグの幾何学文様が織り込まれている（写真13）。ここでは隙間なく織り込まれた幾何学文様によって、赤い地の色が隠されている。この文様は資料 [2] と極めて似ている。ジグザクや四角などといった幾何学文様は、わずかでも糸の色を変えることによって、隙間の無い連続した文様を作ることができる。そのようにして密に幾何学文様が織り込まれたウイプルは、文様を表わす絵緯糸の色によって全体の色が決定される。資料 [2] のように地糸が赤であっても、絵緯糸に多用されている青・緑系の糸系が「青いウイプル」という印象を与えるのである。

こうしたことから、「青いウィピル」が出現するためには、文様糸に青が使用され、多用されるようになるという色の変化と同時に、密に表わすことのできる幾何学文様への変化も起こっていたのではないかと想定される。

資料 [3] の肩の部分の幾何学文様に発想を得て、資料 [1] の肩に注目すると、小さいながらこちらにも菱形を互い違いに3つ重ねたジグザグの幾何学文様が表わされていることに気づかされた(写真14)。この文様が展開して青いウィピルが生まれたと判断するのは早計であろうが、赤いウィピルにも幾何学文様の要素が見られるということは注目に値する。文様の面では全く異なって見えた資料 [1] と [2] であるが、資料 [3] を介すとわずかながらつながりが見られるのである。

3) 経糸の色の变化

最後に資料 [1] [2] の調査からは少々外れるが、地糸にも青い糸を用いた「完全に青いウィピル」について考察したい。『現代マヤ—色と織りに見せられた人々』には、サンタ・カタリナ・パロポの赤、青2点のウィピルが掲載され「年配女性の着るウィピルには、経糸は赤だが、緯糸には青を使ったものがあり、変化の中間段階とみられる」¹⁷⁾と記載されている。星野氏の記述にも「グアテマラの織物素材にアクリル糸が好んで使用されるようになる。はじめは文様糸として、そしてしだいに地糸としても使用されていく。(中略) 現在のパロポ村の衣装は青色だが、使用されている素材はアクリル糸が主流である。」¹⁸⁾とあり、当館所蔵の資料 [2] のような地糸が赤、文様糸が青というウィピルに続いて、地糸も文様糸にも青い糸を用いた「完全に青いウィピル」が現れたことを報告している。現地の写真を見ると1990年代にはすでに経糸に青を使用したウィピルが織られていたことがわかる。¹⁹⁾

経糸の色を青に変えるということは、整経の作業、つまり織りの作業工程における初期の段階から、必要な長さの青い糸を用意しなければならないということであり、織り途中で加えられる絵緯糸の色が変わることとは比べ物にならない程の変化である。先の考察で主張したように、青い糸を用いて幾何学文様を密に織り込めば経糸が何色であっても青いウィピルを作り出すことは可能であるのだが、それでも経糸を赤から青に変えたのはなぜなのだろうか。趣向的な理由か、流通や価格といった物理的な理由であるのかわからないが、いずれにしても文様の隙間からわずかに見える経糸も青い「完全に青いウィピル」を目指したということは間違いない。

ただし、この傾向にもすでに変化が見られている。2011年現在、手織り布の経糸には青以外にも紫、紺、黒といった暗い色が用いられている。そして、くすんだ赤紫のような臙脂を経糸に使用している例も多く見られたことは新たな驚きであった。経糸の色の变化については、今後も経過を見ていく必要があると思われる点である。

4. まとめ

サンタ・カタリナ・パロポのウィピルに起こった色の変化を追って、当館所蔵のウィピル2点を調査し、考察を進めてきた。その結果、赤いウィピルは1970年代後半に起こった変化以前の古いスタイル、青いウィピルは変化以後、経糸にも青が用いられるようになる以前のスタイルとして位置づけられることが改めて確認された。さらに、「赤から青への変化」には、文様の変化が大きく関係していることがわかった。色の変化について考察する際、文様の変化に注目するという新たな視点を示すことができたと思う。今後、より正確な変化の実態を明らかにするために、さらに複数例のウィピルを調査していきたい。

謝 辞

今回調査した資料について、収集当時の貴重な情報をご提供いただきました児嶋英雄先生に、心より感謝申し上げます。また、資料の繊維鑑別実験にご協力、ご指導下さいました本学教授の飯塚堯介先生、本稿の執筆にあたり多くの助言、ご協力を賜りました林宏一先生、博物館館員の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

註

- 1) 人々の生活の基盤となっているのは、市町村にあたる“ムニシピオ (municipio)”と呼ばれる共同体である。
桜井三枝子氏によると、2010年現在、全体のおよそ半数にあたる150のムニシピオがインディヘナ(マヤ系先住民族)の共同体である。(桜井三枝子. グローバル化時代を生きるマヤの人々-宗教・文化・社会. 2010, 明石書店, p.37)
- 2) 東京家政大学博物館. 五色の燦き-グアテマラ・マヤ民族衣装. 東京家政大学出版部, 1998, p.12.
- 3) 星野利枝. “染織の100年をたどる-サンタ・カタリーナ・パロポ村から-”. グアテマラを知るための65章.
桜井三枝子編著, 明石書店, 2006, p.322-323.
- 4) 資料に付着していた経糸と思われる糸を採取し、燃焼実験、および赤外線吸収スペクトルの測定実験おこなった結果、繊維素材は綿と判断された。今回は、資料保存の観点から資料本体から糸や繊維を採取することは避けたため、他の部位に関する実験調査は行わなかった。
- 5) 現地の市場などで、ウィピルに開けられた穴から授乳をしている母親の姿を見ることができる。本資料は継ぎ目が胸の位置にあたるので、継ぎを縫い残して穴を作っているが、継ぎが体の中央にくる2枚継ぎのウィピルでは、適当な位置に縦に切り込みを入れ、縁をかがったウィピルもある。
例：当館所蔵資料, 登録番号13193.
- 6) ウィピルとファハは同色系を用いる傾向があることが現地における調査や写真などから判断される。
- 7) 東京家政大学博物館. 五色の燦き-グアテマラ・マヤ民族衣装. 東京家政大学出版部, 1998, p.44.
- 8) グアテマラのマヤ民族の衣装を収集, 研究, 展示する博物館. 伝統の衣装や染織技術の伝承のため, グアテマラ各地の民族衣装を購入し, 販売を行っている。
- 9) 当地の民族衣装に使用される染料に関しては、前掲の参考文献「五色の燦き-グアテマラ・マヤ民族衣装」に掲載されている、児嶋英雄“マヤ地域における天然染料”, 卜部澄子“五色を染める今の染織”に詳しい。

- 10) 引用文献中より、「イロ・アレマン (hilo alemán・ドイツの糸) と呼ばれる鮮明な赤である」。
- 11) 星野利枝. “染織の100年をたどる－サンタ・カタリーナ・パロポ村から－”. グアテマラを知るための65章. 桜井三枝子編著, 明石書店, 2006.
- 12) NHK取材班. NHK世界手芸紀行③モラ, グアテマラの織物編. 日本放送出版協会, 1990, p.107に掲載あり。
- 13) Altman, Patricia & West, Caroline ; THREADS of IDENTITY, Maya Costume of the 1960s in Highland Guatemala, University of California Los Angeles, Fowler Museum of Cultural History, 1992, p.145.
- 14) Carmen L. Pettersen ; MAYA of GUATEMALA, Their life and dress, Ixchel Museum, 1976, p.145.
- 15) NHK取材班. NHK世界手芸紀行③モラ, グアテマラの織物編. 日本放送出版協会, 1990, p.74-102.
- 16) 東京家政大学博物館. 五色の燦き－グアテマラ・マヤ民族衣装－. 東京家政大学出版部, 1998, p.44.
- 17) 八杉佳穂編. 現代マヤ－色と織に魅せられた人々. 千里文化財団, 1995, p.81.
- 18) 星野利枝. “染織の100年をたどる－サンタ・カタリーナ・パロポ村から－”. グアテマラを知るための65章桜井三枝子編著, 明石書店, 2006, p.325.
- 19) NHK取材班. NHK世界手芸紀行③モラ, グアテマラの織物編. 日本放送出版協会, 1990, p.115.

